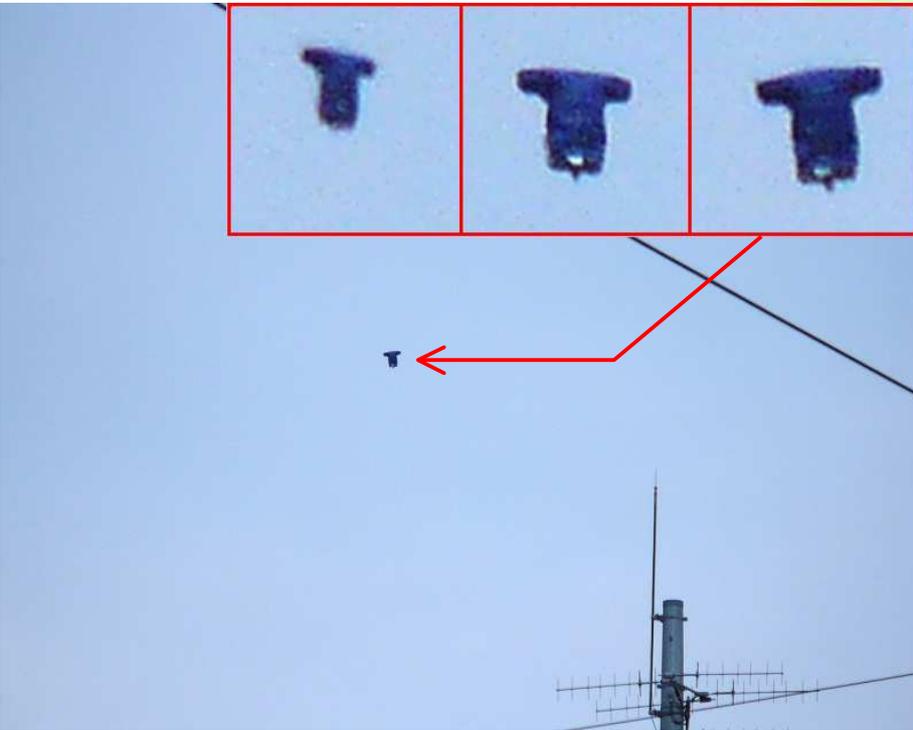


謎の飛行物体

まずは写真をご覧ください。これは2008年7月9日18時04分に、横浜市西部で目撃し撮影に成功した謎の飛行物体です。



変な物体が飛んでいたのを目撃したので、同じような体験をした人がUFOや宇宙人と結びつけて考えたくもなる気持ちが良いわかりました。しかしこれだけでは何とも結論できません。

最初、視界前方に何か動くものがあると感じてよく見ると、林のすぐ右上から向かって左上空へ斜めになりながら昇っているところでした。

姿勢が非常に安定で、揺れもせずゆっくり斜めから垂直に立ち直っていき、風下に流されるよう、向かって左上へ斜めに昇っていききました。同時に下から見て右回り(時計回り)にもゆっくり回転し、最終的には写真左の向きになり、遠ざかってゆきました。

写真を撮ることができたのはアンテナのついた柱の向こうを過ぎたころでした。下の写真に物体の動きと撮影した時の位置を記入しました。

ぐんぐん風下に昇って行き、小さく見えなくなりそうでした。見えなくなる前に追ってみようと、移動しましたが、見通しが悪く、結局見失ってしまいました。



気球ではないかと思ひ、氣象關係の知り合ひに写真を見せて尋ねてみました。ところが氣象觀測用の気球は丸くて白いのだそうです。こんな形のもの日本の觀測用気球で見たことはないそうです。

市販のTシャツ型風船を調べてみると、薄くて半透明、丸味を帯びています。要するに軽くするため表面積を少なくし、厚さを薄くしているのです。しかも50cm程度と小さく手ごろなものがほとんどでした。

物体の大きさを推定する計算もしてみました。写真に写っているアンテナエリメントを縦30cm、撮影地点から林までの距離40mの上空だったと仮定すると、写真上の寸法比率から約1mの物体型風船よりずいぶん大きい印象がありました。

気球とは別のものとして風が考えられます。しかし林の風上(右側)は民家と電線が密集しており風を揚げられるほど広い場所はバスの通る道路だけ。風にしては不自然で、姿勢が約45度回転していますが、その回転中心から挙げたとしても民家と電線だらけである事などが説明できません。

やはり風船のような飛行原理だと思います。それにしても下側に何か棒状の物が付いています。向きを一定に保つ磁気トルカーが想定できますが、ペイロードを付け、効率の悪い形状にも関わらず昇ってゆく風船、周囲は住宅地で企業や研究所など無い、どこかの物好きがやったにしても、これだけの大きさと複雑さの風船をわざわざ作るだろうか？やるならもっと人通りの多い所の方が話題になるであろうに・・・それがありません。これはやはり宇宙人の遣(つかわ)した無人探査機なのであろうか？

UFO・宇宙人といえば矢追さん。そこで矢追さんのサイトを訪問してみました。ところが鑑定にはずいぶん個人情報提出する必要があるのです。もっともです、興味本位で合成した画像を投稿されてはたまらないでしょう。

少し立ち止まって考えました。仮にどこかへ鑑定に出したとしてどうなるでしょうか？ 自分はこの飛行物体を自撃し撮影した事を知っています。鑑定に出しても「実際に存在した物体が写った、何かはわからない」と言えるだけです。仮に「これは**星人の**型探査機です」などと鑑定されたとしても、私には信じられません。とりあえず写真をHPに掲載して、調査は打ち止めとしました。

しかし、この事件は心の底に謎として残り続け、飛ぶ鳥や飛行機の影に、あの飛行物体を重ねて見る自分に気付くのでした。常にコンパクトデジタルカメラを携帯し、ときおり自撃地点に訪れる。もう病気としか思えない、せん妄のような神経症に見舞われていたのです。



それから8ヶ月後、もう忘れられそうになっていた頃の事です。丹沢・本谷川流域の三角沢の大滝へ出かけました。自動車で行けば日帰りなのですが、大倉に一泊し、往復十一時間前後の行程で行ってきました。

帰って写真を見てみると、隅の方に左の黒っぽい物体が写っているのに気がつきました。



向かって左に腕が伸び、右側の腕は手前やや左に突き出して、直線的な部分と丸いハトメのような形があります。向かって右側面にもボタンのようなものが上下に2個あります。自分の置いたザックが写ったのかと思い、自宅で色々引っ張ったり折り曲げたりするのですが、特に左の腕のような出っ張りが作れません。ボタンもありません。どうしてもザックの赤い色が見えてしまいます。おかしい。3日間悩みました。

あの飛行物体の仲間が私の行動を監視していて、大棚で遊ぶ私を上から見下ろしていたのだという妄想のような観念が生じて私から離れないのでした。ひよっとすると私の体には既にチップが埋め込まれ、どこにいても状態や位置情報が最寄の無人探査機経由で母船へ中継され、どこか遠くの星へ送られているのであろうか。

そして、決断しました。もう一度行ってみよう。ただの石や木かもしれないけれども、この病気とも言える症状を終わらせるには、解明するしかないと思ったのでした。

翌週、2009年3月末の丹沢は、行ってみると雪でした。核心部よりもアプローチの方が雪によって高い難易度となっている場所もあり、ザイルを使いました。



三角沢の大棚に降り、遂に同じ物体を発見しました。最初、物体を踏んで歩いていたにも関わらずわかりませんでした。降りて下から見上げると、写真の様に同じ形に見えます。この日は雲がかかり、周囲からの照り返しで暗い部分も良く見えました。ただの流木でした。

木は普段横から見るので長細く見えませんが、棚の落ち口が斜め下向きのため、下から見るとちょうど正面から見る向きとなり、長さ方向が圧縮されて、横からの姿からは想像もできない形に見えていたのです。



左へ延びる腕、右上の直線と穴、その周辺3箇所のみ明るい点が一致します。右側のボタンに見える部分も上側が写っているようです。これは同一の物体であり、棚の上で確認すると普通の流木だったのです。

カメラの特性も関与しています。特に広角で隅の方は解像度が低く、ノイズ低減処理によって詳細な模様が消え、滑らかな物体があるかのように見えてしまうのです。ぼやけた画像を丹念に調べても妄想が拡がるだけです。

これでやっと病気が治りました。あの飛行物体も、何であったかはわかりませんが、何度も現れないのであれば、追い求める必要も無いのです。これ以上振り回されるのが嫌で、そう思いたいのかもしれないませんが、こんな事で仕事や生活を棒に振る訳には行かないのです。

子供の頃（今でも時々）TVで流行ったUFOや超能力、はたまた最後の日、大人たちが真顔で論議している姿がどんなに少年少女たちへ影響を与えたでしょ

うか。それが夢や興味といった生産的な方向へ導くならともかく、私のように、あのような目撃体験と結びついて常軌を逸した気持ちになる人もいるかもしれない。

嘲うことのできる者は、嘲うがよい。

似たような現象として心靈写真のようなものがあります。



真偽のほどはわかりませんが、写真が発明された頃は非常に鮮明に写っていたのに、カメラの発達とともに、次第にぼやけて行きました。

多重露光や現象の失敗のような、物体とは思えないものとなって行き、更にデジタル時代になって多重露光や現象ミスもなくなると、左上写真のような単純な球体（オーブ）にまで退化してきている様に思えます。

この写真はホコリの付いたガラスの近くでフラッシュを使って遠方の黒いカーテンを撮影したものです。フラッシュによって肉眼で見えにくい近くのホコリが光り、ピントが合っていないので丸くボケることで、このように写ります。絞りとシャッターを兼用しているカメラでは三角のような形になる場合が多いです。

私はこのような写りこみやフラッシュの不自然さを嫌って、できるだけフラッシュを使わないで撮影しています。

銀塩時代のもので、私が経験した例を次に示します。



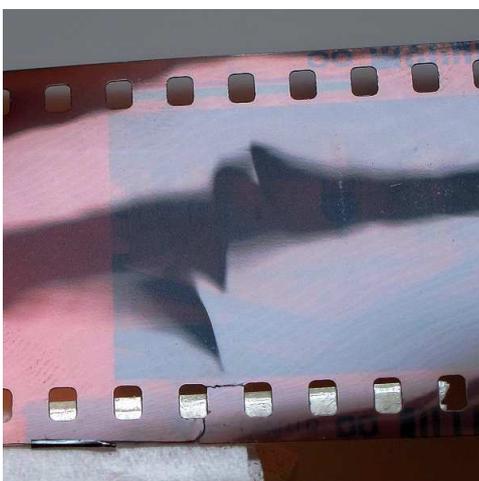
上高地から入り、徳沢で写した写真です（人物はモザイク処理しています）。人物の向かって左に、三本ほどの光の筋が写っています。現地や撮影者にこのような物体はありませんでした。レンズのフリアでもなさそうな形状です。

そこでネガを確認してみると、下の右側のように、確かに黒い筋が写っています、つまり印画紙にプリントする際の問題ではない事がわかります。

しかし、良く見ると撮影範囲より外側（下側）まで黒い筋が伸びています。上下裏返した乳剤面が下の左側です。光を反射させると、三本の折れ目が確認できます。しかも、延長上にフィルムが割れたのを白いテープで補修してくれています。

このコマは最初の一枚目で、写真屋さんでは保障しかねる第00コマ（36枚撮りフィルムで38枚撮影できる位置）でした。おそらく、現像時フィルムを取り出すとき等に折れ曲がってしまったため、化学反応が均等に行われなかったものと考えます。

その他私に寄せられた質問には、フラッシュや太陽光がキラキラした物体で反射したもの、先に説明した塵が写り込んだもの、デジカメの撮像素子が日焼けして空などコントラストの低いもので色むらが見えるもの等とみられる現象があります（守秘義務上公開しません）。



2009年4月、2011年3月

「コックちゃんマガジン」は主観的な体験世界を表現しており、誇張や事実の無視などによる一方的な見解を楽しむ読み物です。